

魔法娼女 理愛

獣欲に嵌まる母娘

小説 高岡智空

挿絵 草上明

立ち読み版



プロローグ

第一章 魔法少女ミリア

第二章 魔罪人の息子、その名は

第三章 敗北の代償

第四章 魔法娼女

第五章 碎ける心、隷属の刻

006

009

041

100

158

216

登場人物紹介

Characters



ありすがわ りあ
有栖川 理愛

魔法少女ミアアとして、世界に侵入した魔罪人と戦う女の子。魔法少女だった母からその役割を受け継いでいる。

ありすがわ
有栖川 ミリカ

理愛の母親。もともとは魔法少女ミリカとして、最悪の犯罪者・魔罪人ヨトギを倒した過去を持つ。

きよら
清良 トキ

理愛と同学年の美少年。理愛への協力を申し出る。

続けざまにイカされ続け、少年の腰遣いと牡槍に何度も喘がされてしまう。それなのに彼はまだ、一度の絶頂も迎えていない。もちろん時間こそ、まだ十数分しか経っていないのだから当然だ。その短い時間でこれだけ立て続けにイカされている自分が、どれだけ牡に飢えていたのかを突きつけられているようで、たまらなく恥ずかしかった。

(つつ……ふぐつ、いつ、いいいいつ……んっ、れ、もおっ……ま、まだあ……つつ)

度重なる嵐のような快感に思考はまとまらず、全身がガクガクと痙攣しっぱなしで、彼の手が肌を撫でるだけで、はしたなくビクツと跳ねてしまう。それでもミリカは、身体の奥底で少しずつ戻ってくる力を感じ、ひたすらにその機を窺っていた。

「すごいですね、人妻の性欲って……これだけイカされてトロトロになっても、まだ求めてくるじゃないですか。そんなに欲しいんですか、ボクの精液が……この奥に。ほら、答えてくださいよ、歴代最強の魔法少女……エースのミリカさん？」

少年がそんな言葉をかけながらミリカの髪を梳き、トントンと子宮を抉る。突き上げられては腰を引く、その繰り返して子宮は元の位置よりかなり下まで来ており、その入り口も大きく開いて蠢動し、ペニスを押しつけられるたびにチュウチュウと吸いついていた。

(ふゆうう……んっ、く……ゆ、油断、ひ、ひて……っ、いま、しかあ……)

時間を置いて回復したなけなしの魔力を集め、身体中の血管にそれを送り込んでゆく。治癒魔法の応用による、体内異物の察知、及び中和だ。異物とはもちろん、彼に飲まされた麻痺魔法薬のこと。効果が強いとはいえ、飲んでから相当に時間も経っている。

(よ、よか……った、これえ……んぐつ、ふつ、ふううつ……効果が、き、切れ、かけてたのね……これなら、わたし……れ、れもっ……)

回復した魔力は微量だが、なんとか効果すべてを排除できそうだった。魔力の波が、敵性魔力によって乱れた身体の神経を正し、動かそうとすれば痺れだす四肢の先が、少しづつ人の温もりを取り戻してゆくように感じる。だがそんな魔力の流れは、これほどの距離で抱き合い、しかも粘膜を密着させている相手にも伝わってしまったことだろう。

「——ふうん、驚きました。全盛期の百分の一にも満たないミリカさんの魔力で、ボクの薬が中和されるなんて……たいした技術ですね」

耳元にささやくトキの声音に耳朶が震え、頭の裏から首筋へ、甘い痺れが広がる。

「でも……そんなことでいままさら、逃れられますかね……」

「ひぐううつつ！ あ、あたり、まえよお……これで、も、もお……」

言いながらも声が震える。なにしろ相手は、全盛期の自分でさえ苦勞させられた魔罪人を、さらに強力にした存在。身体の自由が利いたとしても、相手にすることはおろか、逃げだすことさえままならないかもしれない。

(だけどっ……理愛にすべてを伝えられれば、それだけでっ……)

僅かにでも隙を作れれば、その間に娘への伝言を残すことも可能だ。魔法を使う手段も入れれば、実に百通り以上のパターンを考えられる。そのためにもまず、少年に組み伏された状態をなんとかする必要があった。

「ふっ、くうっ……ううっ、んっ、あっ……っ……」

両肘をついて、腰を引きながら少年から離れようとする。小さく動いただけでも、肉棒が膣内で擦れて声の上擦る。それでも諦めずにミリカが足掻いていると、驚いたことに彼は抵抗をやめさせようともせず、逆に自分から腰を引いていくではないか。

「さあ、ここがギリギリのラインですよ、ミリカさん？」

「んふうううっ……ど、どういう、ことよっ……あひいっ！」

乳首とクリトリスを軽く擦られ、鋭く走った刺激にビクッと背が跳ねた。

「ボクはここから動きません。亀頭だけがしつかりと食い込んだこの状態……抜こうとするのに、一番厳しい部分でしょう。ここからミリカさんが逃れられれば、ボクは理愛さんにすべてを打ち明け、消え去ることを約束します。ですが、そうできなければ——」

(で、でき……なければ……?)

無言の少年から感じる圧力に、普段は考えもしない敗北の可能性を考慮してしまったというのにそのことにも気づかず、ミリカはゴクリと生唾を飲む。しかし少年は、それ以上なにかを口にするのではなく、耳元に顔を寄せてただひと言だけささやいた。

「その先は、ミリカさんが一番よく知っているはずですよ」

「——っっ！ う、ぐっ……そんなの、わからないわっ……」

なぜか胸の奥がトクンッと切なく震え、お腹の奥がキュッと締めつけられるように疼く。相手の言葉に流されてはだめだと言い聞かせながら、腕と足腰に力を込める。

(つつ……へ、平気よっ……わた、ひ、は……ぜ、絶対いい……んひいいいつつ?)
けれど——。

「ふふっ、どうしたんですか、ミリカさん……」

(こ、こん、らああ……あぐうんつつ、んうっ、う、嘘よおお……ひはああっ!)

膝を立て、ベッドを蹴って身体を引こうとする意志とは裏腹に、脚が少年の腰にしがみついてゆく。先ほどと同じ体勢で、身体を中心に何度も抉ってもらって味わったあの快感を忘れられないというように、少年の腰を引き寄せて自らの腰を押しだし、開ききった淫肉へと巨根を招き入れてしまう。

「薬の効果、もう残ってないですよね? それなら反射に抵抗して、自分の意思で動けるはずじゃないですか……ほら、手伝ってあげますからチンポ抜いちゃいましょうね」

唇を歪めた底意地の悪い、心底から女の本性を嘲笑っている表情を向けて、トキがわざとらしく腰を引こうとする。盛り上がった龟头がGスポットを抉り、膣口に粘液をダラダラと絡ませて、狂おしいまでの快感を刻み込んでいた。

「ひいあああああつつ! あああっ、だめっ、う、動か、ない、れええつつ!」

とつさに動いたミリカの腕がベッドから離れ、ガッシリと彼の首に縋りつき、きつく抱き締めてしまう。脚もさらに強く絡みついて、簡単には離れないように足首でロックまでかける。そのまま自らの腰を浮かせて擦り寄ると、求めてやまない牡棒が欲求不満のミリカの秘部を、どこまでも深く開拓してくれた。

(あうっ、んあっ、あはあああ……こおっ、これえっ、もおおっ……)

その官能が心に刻みつける、本能がこれを離したくないと、切望していることを。

蕩けきった淫肉がペニスをしゃぶり、奥へ奥へと飲み込むのがはつきりとわかる。膣壁で締めつけるたびに肉棒がビクビクッと脈動する、それが己の牝器官による刺激のせいなのだと理解すると、心の底から嬉しさが込み上げるのをこらえきれなかった。

自分の魅力を再認識させてくれる男の反応、これほど女の自尊心を満たすものはない。

「——それじゃ、本気でしてあげますからね。たっぷり啼ないてください」

「ひっっ——んいいいいひっっ!! ひぎっ、いはっ、んにゃああああ——っっ!」

軽く反動をつけるように引かれ、そこから叩きつけられたペニスが蕩肉を引き裂き、瞬間に奥の奥までを蹂躪してくる。緩みきった蜜壺はもちろん、呼吸するようにパクパクと開閉していた子宮口までを亀頭でこじ開けるように押し込み、歡喜の淫涎を流すミリカの秘部を、少年の欲望が隙間なく満たしてゆく。

——ジュルルルウウウツ、グチュツ、ズチュウウウ……ジュブンツ、クチュウウツ!

「いっひいいいっっ! んひいいっ、あひっっ、はへええええっっ!」

先ほどのような技巧を凝らした抽挿ではないのに、膣道を大きく広がらせるほどの巨根だというだけで、ミリカの濡れ蕩けた秘肉はもう、トキへの抵抗を完全に失っていた。少年の耳へセックスへの賛美を伝えるように大声で喘がされ、恋人のように強くしがみつ、腰をくねくねと揺らして擦りつけ、待ち受けるただ一つの未来——理性にとっては絶望的

ながら、本能にとつては待ち侘びたものである最高の未来を目指してしまふ。

(も、もうつ、ああああつっ！ もうつっ、んぐううつっ……だ、だめつ、らめつっ……ひやめえええつっつ！ んくつ、きひやうつ、しゅごつ、しゅごいのおおつっ！)

これまでの人生で一度も感じたことのない、泥沼のような牝快楽に理性が沈んでゆく。激しく振られる腰の動きに合わせて膣内を抉られる、その一往復で軽い絶頂を迎え、ビクビクと全身が痙攣している間に、ミリカの肉体は深い絶頂まで追い込まれていた。

大粒の涙がポロポロと流れ、肉棒のことしか考えていないような、淫欲に潤んだ瞳がうつとりと細められる。大きく開いた唾液塗れの唇からは、牝欲による熱を孕んだ甘い吐息が溢れて彼の顔を湿らせ、伸びた舌の先から唾液が滝となって流れ落ちた。

「あぐうううつっ、んおつ、はおおおつっ！ おほつ、んおおおつっつ！」

震える媚粘膜の隅々が、唾え込んだ牡肉の震えを察知する。根元から押し寄せる熱い白濁の気配を強く意識し、背筋がゾクゾクと震えて、期待に頭の奥が白く染まる。快感に力が制御できず、たまらずトキの肩口に爪を立ててしまつても、トキは痛がることも逃げることもせず、すべてを受け入れるように強く抱き留め、髪を梳いてくる。

あまりにも女慣れしたその仕草も、女を思いだしてしまつた年増にとつては、胸ときめかせる快楽にしかならない。再び極めさせられた何度目かの絶頂に震え、悦びに表情を蕩かすその耳元へ、少年の甘いささやきが響き渡つた。

「最後の選択です……そろそろイツチャイそうですからね、こういうのはどうです？ ミ

リカさんが膣内に射精してほしければ、ボクの舌に吸いついてください。そうしてくれないなら、ボクはチンポを抜いて二度とあなたを抱きませんから……ふふっ」

（んふあああつっ！ ひぐっ、んああつ、なっ……なによ、それええ……そ、そんらのつ、ずるいつ、ずるいじゃないのおつっ！ あああつ、り、ああ……わら、ひいつ……）

ささやいた唇が耳朶に口づけ、ゆつくりと唇に近づく。吐息の感触に身を震わせ、やがてそれが視界に入った瞬間——ミリカの頭の中から、娘への想いは完全に溶け消えた。

「ふあつ……あむううううつっ！ んじゅつ、じゅるつつ、ふあぶつ、あむつ、んちゅうううつ……じゅるるるるつ、ぐちゅぶつ、ちゅばああ……んへええ……」

年若い美少年の唇を容赦なく吸い上げ、己の唇を飾るルージュの色を移しながら、ミリカは肉悦に溺れて彼の舌をしゃぶり尽くす。待つていましたとばかりに、少年の唇からは煮込まれた蜜のようにドロリと濃厚な唾液が注がれ、唇を濡らして流れてゆく。いくらかはボタバタと周りに飛び散るが、それ以外はしっかりとミリカの喉奥へ伝い、その味を堪能しながら、子持ち人妻は背徳の快感に身を震わせた。

『ふふふ、可愛いですね、ミリカさん……いや、ミリカ。これであなたはボクのものだ、その証をしつかり注いであげますからね……それを嘔み締め、奴隷に堕ちろ——』

（ふあ、へえええ……なんろ、こええ……あああ、もお……わ、かん、ら……）

トキのはつきりとした意思を感じた瞬間、ミリカの精神と肉体には完全に枷かせが嵌められてしまった。もう逃げられない、逃げようとも思えない、強力な魔力と牡の魅力による支



配が、心の隅々にまで染み広がってゆく。

「んもおおつ、はおむうううつ、んじゆるつ、くちゆつ、れりゆううつつ♥」

心から湧き上がる、自分を抱く少年への愛情を抱え、その命ずるままに彼の唇をしやぶり、舌を吸う。おもらししたかと紛うような股間へと、さらに強くペニス突き立てられ、膣内を徹底的に抉られ、頭の中に激しいスパークが散った。その刹那――。

『お前は今日から魔罪人の性奴隷だ、ミリカ……』

「んんぐううううう――つつつ!! はふおおおつつ、はおつつ、んおおおおつ♥」

――グジュツブウウウウツツツ! プチュツツツ、ドビュルウウツツツ、ビュクビュクビュクウウウ――ツツ! ビュルビュルビュルウウウウウツツツ、ビククンツツ!

大きく爆ぜた肉棒が、マゲマを思わせるほど熱くドロドロした牡欲を大量に噴き上げ、子宮に龟头を半ば以上もめり込ませながら、胎内に次々と注ぎ込んでくる。それはもはや液体ではない、ゼリーのように固まった熱々の子種――それがポンプで汲み上げられるように何度も噴き上げ、子宮を叩き、ミリカの膣内を徹底的に灼き焦がし、印を刻む。

「はぎゅうううんんつつ、んひつ、ひつ、ひあつ、あひつ、はひいひいつつ♥」

自らの意思で夫も、娘も、使命も、誇りも――すべてを投げ捨てて快楽に溺れた、最低の淫売牝だという証を、頭のネジが飛んでしまうほどの快楽とともに、刻み続ける。彼が抱くのは背中と腰だけ、そのおかげで自由の利く熟尻肉をタップと振り、胸元にぶら下げた熟乳果を無様に躍らせ、娘と同年の少年に年甲斐もなく身を擦りつけてキスを浴び

せ、快感に背筋を大きく仰け反らせて喘ぎ放った。

「んいっつ、いぐっつ、あいいいいぐうううんっつっ♥♥んいっ、いぐっ、ああっつ、らめっ、まらイグッ、イクッ、いつぐふうううう——っつっ!!」

込み上げる快感に下腹部が震え、小水が飛沫となって撒き散らされる。今日より主人となったトキの制服を完全に汚し、娘のベッドまでグチョグチョにしても止まらず、排泄を終えた尿口からは透明の噴水が噴き上がっていた。

(もふっ、もらっ、らめっ、もおらめええっつっ! あへっ、はへええっつ!)

理性を失ったように唇が開ききり、舌がめいっばい伸びて、やがて力なく垂れ下がる。瞳は淫欲に染まってハートの印まで浮かべながら、蕩けきった表情で喘ぎをもらしつっ、ミリカの四肢は完全に弛緩してしまった。

それでもなお、少年の肉棒は萎えていない。このまま何回戦でも続けられると言わんばかりに硬さを保ったままのペニス、それが膣口を大きく開かせて、ズルリと抜かれる。

「んひきいっつっつ! いっ、はっ……はああ、あうっ、ああああ……」

抜き取られる衝撃に声を響かせ、けれどなんとか意識は保つことができた、元魔法少女。その口元に少年の逞しい勃起が寄せられ、むせ返るような淫臭が鼻を突く。ホカホカと湯気の立つ牡肉を、焦点の合わない視界に映したミリカは——。

「はああ……あむうっ、んべろっ、れろおお……んちゆうっ、じゆるおお……」

そうするのが当然というように顔を起こし、躊躇いもなく唇に飲み込んでいった。

そんな理愛の姿を見て、男子たちはわかりやすく怒りの感情を滲ませて、声音を低くした。だが理愛は、彼らの声など聞こえないくらい意識が混濁し、髪を掴まれて起き上がりながらも、なにをされようとしているのか、気づけなかった。

「よつと……さあて、誰からいくよ」「まあ、あいつしかねーわな」

投げだされた身体が、いつの間に関に運ばれていたのか、棒高跳びのクッションに使う厚いマットに横たえられる。けれどこんなところに寝かされ、なにをされるのか――。

「んぐつ、はあつ……あ、え――」

霞む視界を懸命に開き、目の前を見た理愛は絶句する。先ほど手にしていたものとも、口にしていたものともまるで違う、見たこともない汚塊がそこにはあった。

「な、につ……そ、それも、お……おちん、ち――ひいつつ!! やつ、いやつ、いやあああつつ! やだつ、やめてつ、お願いいいいつつ!」

「ぶふつ、ぐふふふふううつつ! かかか、可愛いよお、理愛ちゃんつ!」

さつき口にしていたペニスより遥かに太く、長い。けれども亀頭の半ばまで包皮に覆われた、見た目もグロテスクであまりに不潔なペニスが、目の前に突きつけられる。その持ち主の男子は、理愛のクラスで女子たちからもっとも嫌われ、陰では『アブラミ』と呼ばれて蔑まれている、醜く太った生徒だった。

背は理愛より少し高いだけと男子にしては低く、その分を横に伸ばしたかのような肥満体。頭皮も薄く、いつも脂ぎって汗をかき、前日に入浴していないのではと思うほど、不

潔な臭いが漂っている。口臭もすえたような臭いで、分厚い唇の周りに無精ヒゲがブツブツと生えているその顔は、イボの多いガマガエルのようなのだと噂されていた。

入学当初は当然のように男子からも嫌われていたが、そんな彼もいまでは、男子たちから一目を置かれている。それは、林間学校で彼の並外れたサイズのペニスを目にしたからだ。勃起しなくても男子たちに畏敬の念を抱かせるそれは、勃起すれば軽く十八センチを超える巨根で、片手で包めないほどの太さをしていた。

「みみ、みんながねえ？ 僕と理愛ちゃんのラブラブ初エッチ、見たいんだって！」

下半身を晒し、片手で肉棒を扱きながら、アブラミがのしかかってくる。むせ返るような汗臭さが身体中を包み込み、ニヤけた脂顔がこちらを覗き込んだ。それだけで理愛は背筋が寒くなり、瞳を見開いて表情を引きつらせ、マットの上を後退しようとする。

「や、やだっ……おねっ、お願いっ、やだっ……あ、あぶたに蛇谷くんっ、やめ、て……」

カチカチと歯が鳴る、手足が震えて止まらない。けれどそんな理愛の姿をどう捉えたのか、彼は唾液を垂らして笑顔を浮かべ、小柄な理愛の腰を捕まえた。

「そんなに照れなくていいよお、僕と理愛ちゃんの仲なんだからさあ……ぶへへへえ」

まさか——と想像し、背筋が凍りついた。

クラス的女子たちとは違い、理愛は人を見た目で差別したりはしない。だからこそ、彼にも普段から誰にするのとも変わらない態度で接していた。そんな理愛の姿に好意を抱いた彼にラブレターをもらったこともあるが、理愛はなるべく傷つけないように、優しく断

つたはずだった——少なくとも、理愛の中では。

しかしこの態度、彼はそうは思わなかったらしい。あの断り文句もすべて、彼にとつては脈あり、あるいは好意の裏返しというように聞こえたようだ。

「じよ、冗談だよねっ、違うよねっ……やだ、やめてっ、やめてえええ——っっ！」

確かに以前の理愛ならば、彼のことを特別嫌ったりはしなかっただろう。けれどトキという、目の前の彼とは対照的な存在である美少年と触れ合ったことで、次第に理愛の中にも男子に対するフィルターのようなものが作られていた。その状態で見ると彼はあまりにも汚く、醜く——どう考えても、性交の対象になんてできない相手だった。

(だって、初めてっ……私の、初めてなのにつ……処女っ……好きな、人に、もらつて……もらい、たかつたのにいっ……やだ、やだよおっ……)

ポロポロと大粒の涙が、精液塗れの顔にこぼれ落ちる。

ハクラクに負けたことである程度の覚悟はしていたが、こんな目に遭うなんて想像もしていなかった。腰を掴まれ、引き寄せられ、たまらずヒツと声がもれる理愛。

だが、その頭の中にハクラクの声が響き渡る——。

『おやおや、よろしいのですか？ 拒絶なさつても構いませんが、代わりとなるのはお母様です……そちらの殿方の子種が、お母様の子宮で貴女の弟となるわけですねえ……ククッ、いやいや失礼。それも一興でしょうなあ？』

(——っっ！)

「お母様をお守りしたいのでしたら、どうぞ笑顔で処女をお捧げください……ご学友がカメラを回しておいでのです、そちらから視線を逸らしませんよう」

「えっ……やっ、なにつっ、どうしてっっ！」

先ほどの理愛の嘔吐がよほど腹に据えかねたのか、授業風景の撮影用に教師が用意していたビデオカメラを使い、男子たちが二人の様子を撮影し始める。

「へっへへへ、さっさとそいつのバージョンもらってやれよお、彼氏くんよお？」「理愛ちゃんもこっち向いて、笑顔でよろしく」「エロく撮ってやるぜ、永久保存版だ」

「性処理委員のお仕事つてことで、学校中に配るんだからなあ？ 頼むぜえ……」

その言葉を聞き、もはや言葉もなく頭の中が真っ白になった。

狂っている——こんなところで、まるで理想からかけ離れた相手に純潔を奪われ、それを撮影され、あまつさえ学校中にばら撒かれるなんて。

これは現実ではない、悪夢に違いないと、思わず現実逃避してしまう。だが——。

「ぐふふふふつ、嬉しいなあ、理愛ちゃん♪ やや、優しくするからねえ……」

理愛が意識を取り戻すように、アブラミが腰を抱き寄せて、巨根の先端を理愛の秘部に押しつけてくる。スカートもショーツも膝まで脱がされ、その状態で足を掲げた変則的な正常位姿勢。どう足掻いても逃げられない、悪夢の中で、彼の腰が前進する。

「やっ……もうっ、いやっ、いやあああ……あううううっ、えぐっ、ええええ……」

皮を引きずり下ろし、剥けきった巨根の先端には、グラタンの上のチーズにも似た大量

の精垢がこびりつき、不潔極まりない。そんなおぞましい牡塊に犯されようとしているのに、欲情を訴える熱さに粘膜を擦られた瞬間、理愛は自覚してしまった。

(さい、ていつ……最低だよつ、私つ……こんなに、こんなのでえ……うぐつ、ぬ、濡れ……濡れちゃつてるつ、身体……や、だよつ、トキくんつ、トキくんつ……)

グチュウウツ！ と媚粘膜が強引にこじ開けられ、痛みが脊髄を走り、肉壁が軋むような音を立てる。自慰のときでも下着の上からしか擦ったことのない、穢れを知らない幼い淫肉。けれどもこのひと月、毎日欠かさず浴び続けた淫らかな感覚のせいで、理愛の秘部は牡を感じれば容易く緩んで唇を開くくらい、淫売な牝にされてしまっていた。

「ひやらつ、やらつ、やつ……いぎつつ、ひつ……んいいいいいつつ!!」

—— ツプツプツプツ……プチュツツ、ミチミチミチイツツ！ グリュウウツ、グチグチツツ、ブツウウツ！ グリュツツ、ミチュチュチュツツ、ズプウウツ！

(あがあああつ！ 無理つ、こんらつ、は……はい、らなつ……いやあああつ！)

吐き気がするほどの痛みと圧迫感が、下腹部を押し上げてお腹に達し、さらに胸を貫いて喉奥へせり上がってくる。肉壺を開拓され、力任せに女の子の大切な部分を陵辱されるまで勢いを弱めず剛直が秘唇へ捻じ込まれる。プルプルと頭の天辺てんぺんから指先までが余すことなく震え、身体がバラバラに弾けそうだった。

—— グチュツツ、ニチュクチュウウツ……グツチュウウツ、ジュブブブツツ！

「いらつ、いだ、ひつ、いはいいいつつ！ やだあああつつ、やめてつ、やめてよお

つつつ！ わらひつ、こんらつ……こんらのつ、やらつ、やなのおおおつつ！」

「ぐふふふつ、照れてるんだね、理愛ちゃん可愛いよつ、可愛いよおつ！」

アブラミのだらしなく緩んだ口から臭い唾液がこぼれ、涙と精液で汚れた理愛の顔がさらに汚される。その汚辱感にさらに涙がこぼれ、頬にポロポロと光の粒が転げた。

その間も止まらず、理愛の胎内は彼の牡に制圧されてゆく。滲むなどというレベルではない、大量の流血と牝蜜に秘部が桃色に染め抜かれ、中心が野太く膨らんだ肉棒が半ばまで食い込んでいた。指一本さえ通らないほど狭い、幼い肢体の膣道が成人男性でも持ち合わせないような巨根に押し開かれる、その光景がすべて撮影されてゆく。

「おう、迫力あるね〜」「レイプAVみて〜」「理愛ちゃん淫乱だし、和姦だけどな」

溢れんばかりの快感の証、痛々しい破瓜はかの証、そして犯す男の満足げな醜い顔、泣き濡れる美少女の悲壮な表情——それが理愛の初セックスだと、カメラに記録されている。

「うひつ、ふひひひひつ♪ う、嬉しいなあ、理愛ちゃんの初めての相手は、ぼぼ、僕だからねえ？ これから何十人とセックスしても、僕が初めてなんだよお？」

「つつ……あつ、うつ……ひつぐ、えぐつ、えう……うえええつ、あああああつ……」

彼の言葉はどこまでも事実だった。このあと、誰に抱かれることもなく魔罪人を倒し、将来好きになった相手に想いを受け入れてもらって抱かれ、子供を身籠ったとしても——純潔を奪ったのは目の前の太った少年だという、その現実はなにがあっても覆らない。

（ひくつ、うぐつつ……ええええつ、よご、されたつ……私の、全部つ……）

痛みを下腹部に突き刺され、ミリ単位の動きで肉を引き裂かれるにつれ、心が砕けるほどの衝撃が頭の奥に響いていた。だというのに――。

「ひぐううつ、えうつ、んえつ……ふあうつ、んうつ、んつ……んううつ！」

――グチュツツ、チュブツ、クチュウウツ……ズチュツ、グチュウウツ……

濡れた牝肉の音が、うるさいくらいに耳に流れ込む。こんな扱いを受けても秘部はしとどに濡れ、理愛の本能はすでに彼の巨根を受け入れようとしていた。最奥を軽く小突いた肉棒が引き抜かれると、まるで湯船を掻き回したような水音が大音量で響き、肉傘に掻きだされた牝蜜が、限界まで開いた膣口からゴポオオツ……と溢れる。

「ホホツ、ホハハハハハハツツ！ 素晴らしいつ、素晴らしい光景だあ、ミアアさん……ククククツ、その調子でたつぷり感じてくださいよお！ 貴女が快感に溺れれば溺れるほど、ワタクシの魔力はより強く、より濃く……より大きくなるのですから！」

頭の奥に響く魔罪人の言葉にも、もはや怒りが湧いてこない。圧倒的な悲しみに心が引き裂かれ、痛みが身体が言うことを聞いてくれなかった。

「ぐひつ、ぐひひひひつ！ 最高つ、最高だよおつ、理愛ちゃんつ！」

「あぐうううつ！ んふつ、ふあつ……んくつ、くふつ、うううつ……んううつ！ あひつつ、ひいんつつ、んあつ、ふああああんつつ！」

往復されるたびに牝肉が蕩け、潤滑用の淫蜜が溢れて止まらない。それに気をよくしたアブラミが腰を振るたび、理愛はゾクゾクツと背中を流れる快感に身を跳ねさせ、唇を開



いてしまっていた。懸命に声を我慢しようとしても、元から柔らかくなっていった肉壺が牡に擦られるせいで、すぐさま喘ぎが堰を切って飛び出す。

（おっ……かし、いよっ、こんなっ……へ、んっ……んはあっ！ 私の、か、らだあ……あうっ、ううっ……おかしくなってる、よっ……んくっ、ふああっ……）

魔法少女としての生き方を受け入れ、戦うことを決意してから初めて感じた無力さ、その弱った身体に促されるように、思わず弱音が胸から溢れだした。

「誰かあ……助け、てよおっ……んうっ、あふっ、ふああんっつ！」

声の上擦った瞬間、勢いよくペニスを引き抜かれ、膣口すぐにあるお腹側の粘膜、そのザラザラした柔らかな媚肉を、張りだした広い肉傘で挟られる。たちまち理愛の腰が浮き上がり、お尻が揺れるほどの快感が突き抜け、甘えるような嬌声を叫ばされていた。

「んひゃふっつ♥ あひっ、いっ、んうっ……くふっ、ひやうっ、んあああっ！」

弱点を晒してしまったと後悔するも、すでに遅かった。アブラミはその場所を重点的に擦るように浅く挿挿を繰り返し、理愛はそのたびに甘く喘いで腰を寄せてしまう。相手にしてみれば、理愛を感じさせようという愛情の表れなのかもしれない。けれどされている側にすれば、こんな醜態は恥辱以外のなにものでもなかった。

「むふひひひひっ、可愛いなあっ、理愛ちゃんっ！ んっ、んうっつ、イクッ、イクよおっ！ いっぱいだしてあげるからねえっ、僕のザーメンッ！」

（——っつ!! そんなのっ……いやっ、絶対っ……やだよっ……）

大量に浴びせられ、飲まされそうになったあの生臭さ、青臭さとおぞまじさが脳裏をよぎり、嫌悪が全身を駆け抜ける。声押し殺すために、そして劣情に任せて抵抗できない女の子を犯す、最低な男の精液を注がれることへの抵抗を込めて、理愛は唇を噛みながら歯を食い縛った。しかし身体に力を込めればそれだけ筋肉が強張り、膣肉が締めつけられ相手に快感を与えながら、自分まで牡肉を強く感じ取ってしまうことになる。

——グチュウウウウツ、又チュツ、グチュツ、又ポオオオツ、ズチュツ！

「んぐつつ、ひきつつ……いつ、あつ……つつ……ふうつ、んつ……んはああつ！」

蕩けながらも粘っこさを孕んだ理愛の蜜壺が、食いついた肉棒に熱烈なキスを浴びせ、挿挿に合わせて引つ張り回される。筒になったものをそう言うのはおかしいが、まるで膣肉の内側をペニスによって扱かれているような、嬌声を抑えきれなくなるほど凄まじい快感——粘膜はヒクつきっぱなしで、一往復するたびに快感の淵まで追い上げられる。

（こんなのつ……いやなのにつ、どうも……できないつ……逃げられないよおつ……）

「おつおつおつ、あああつ！くるつ、イクよつ、あああつ！」

おぞましい鳴き声のようなアブラミの喘ぎ、その声に寒気がした。それでも身体の火照りは消えることなく、膣奥までミッチリと満たす牡肉の感触が膨らみ、根元から込み上げる精液の気配を感じさせられる。小柄な身体を抱き枕のようにして巨体にしがみつかれ、巨根の先端が、さらに深くへ食い込んだ。限界まで開いたと思っていた膣壺をそれ以上上で押し開かれ、狭い蜜壺の最奥を小突かれる刺激に、キュンツと下腹部が疼いてしまう。

(つつ……そんなつ、一年生相手なんてつ……いったい、なにをするのおつ……)

すでに下級生にまで知られるくらい、自分の痴態が知れ渡っていることに、底知れぬ恐怖を感じた。背後に屈み込んだ一年男子の視線と息遣いを小水塗れのお尻全体に感じ、消え入りたくなるほどの羞恥が込み上げる。

(いつ、やああつ……そ、そんなに、み……ない、でつ……くふつ、うううんつ……)

秘口だけでなく、たとえパートナーの男性であっても秘すべきも一つの淫部——菊蕾をじっくりと見つめられているのを感じ、頭が熱く火照る。耳も真つ赤に染まり、これ以上彼のほうを振り返っていられなかった。羞恥を誤魔化すように顔を伏せたその瞬間、信じられない感覚が、尻房の谷間にネチヨリとおぞましい感覚を伝えてくる。

「んふううつつ!! んぐつ、んもつ、おとおおつつ!」

「有栖川先輩のお尻を味わえるなんて、超光栄つスよ、先輩の可愛いアナル……おケツマノコを、たつぷり可愛がつてあげますからね。先輩も愉しんでくださいよ」

彼が言葉を吐くたびに、お尻の奥に脂つこい吐息が突き刺さるようだった。やはり間違いない、この感覚は舌と唇のものだ。

「こいつ、入学したばっかのガキのクセに、かなりマニアックな性癖してやがつてなあ……女のケツを存分にしゃぶりたいって、日頃から言い続けてやがるんだぜ」

(え、や、やだつ……なにっ! なにして——やめてつ、そんな汚いとこおっ!)

不浄の穴に男の唇が密着し、抵抗も躊躇いもなく舌が這い回っている、それを実感した

瞬間、背筋がゾワゾワツツと強烈な悪寒に満たされた。たまらず腰を振って逃れようとするが、下半身はまるで動けないように拘束されており、ビクともしない。

「んじゆるううつつ！ おゝ、すげえ濃い味、最ツ高……んちゆるちゆるうつ……」

「んやあああつつ！ やらっ、ひょん、らっ……き、きひやつ、な……はほおお……」

聞いたこともない、排泄口を弄るなんて行為に頭が混乱し、現実を現実と認識できなくなる。そんな理愛の菊肉を犯そうと、鍛えられた彼の舌技が容赦なく這い伸びる。

「かふっ、あふうう……んぐっ、くっほ……ほああああつ……ほふっ、ほおお……」

唾液をたつぷりと菊皺に馴染まされ、数分間繰り返した拳匂に、とうとう舌先を捻じ込まれた。そのまま力を込めて硬さを増した舌が、柔軟さと湿り気を利用してグルグルと回転し、入ってすぐのお尻の中を、弛緩させるように舐め回す。嫌悪と恐怖しか感じない行為だというのに、そこから伝わってくる感覚は、理愛の予想を超越する感情だった。

「——つつ!? はくっ、あっ、いっ……ひいんっ！ んっ、な、なん、でっ……やだっ、やだよおっ、ウソ……こんなの、ウソおっ……ああああつ、どう、してええっ……」

——グジュルウウウウツ、ツプツ、ズリユリユウツ、グチュルウウウ……

舌先が回転するたびにお尻が痺れ、性感帯を弄られたのと同じ甘い波が、菊壺の奥へ広がってゆく。白肌の震える尻肉も、そしてヒクつき続けて蜜汁をもらす淫唇も、汗と精液塗れの勃起する乳首にも、震え立つような快感が押し寄せていた。

「あひいいいい——つつ！ んふっ、ふおっ、はおおおつつ！」

(いやああああ——つつ！　なんでっ、気持ち……気持ち、よくなっちゃうのっ!!)

熱く蕩けた炙り肉のような感触が、強張った菊粘膜を舐め溶かしてゆく。そこから十分に渡り、刺激を与え続けられた理愛の菊皺は容易く決壊し、もはや彼の舌を抵抗もなく受け入れられるほど、だらしなく緩みきってしまった。舌肉の抽挿を受けてお尻がビクンツと跳ねる、そこを狙い定めて深く舌を突っ込まれると、伏せていたトロトロの発情顔が上がり、淫猥に緩んだ瞳を中空に這わせてしまう。しかも——。

(ひゃふっ、はんっ、やはああっつ！　あいつ、ち、がうっ……んうううっつ！)

筋肉に直結する部分を弄られているせいか、先ほどから下半身に力が入らない。甘い感覚に身を委ねそうになるのをこらえながら、懸命に力を込めようとするのだが、広がった舌腹に腸粘膜をベロリと舐められると、それだけでガクガクと膝がわなないた。

「ぷっはああ……すっごいっスねえ。外は汗とオマンコ汁で甘酸っぱいの、奥は苦くて香ばしくて……外も内側も鮮やかなピンク色で、ただ舐めても飽きないっすよ」

「~~~~~んうっ、んぐうううっ、あとおおおおっつ！」

他人からアナルの味と色合いを批評される恥辱に、理愛は顔を真っ赤に染め、それを周囲に聞かれまいと必死に声を張り上げる。けれど声にならない叫びは遅く、すでに周囲の男子たちにまで、理愛の恥ずかしい情報は共有されてしまった。言葉にできない羞恥が全身を駆け巡り、それがさらに肉体を火照らせ、下腹部を厚く疼かせる。

「ふはうううっ、んぐっ、ふむううっ……んああああっつ、はああああんっつ！」

下半身は動かない、けれどお尻だけはほんの数ミリだけ動く。そのせいで、理愛はアナルで舌を挿入されるたびに何度もお尻を振り、まるで舐め奉仕を望んでいるかのようにお尻を突きだして、いやらしい喘ぎをもらし続ける。

(はふうううんつつ！ こえつ、ら、らめええ……くふううつ！ んひつ、ひかりや、はいんにや、ひつ……あああ、くるつ、またつ……れちや、ふつ……んにやあ……)

ヌルヌルと唾液を擦り込まれ、どんどん下半身が緩んでゆく。家から持ってきた水筒のお茶を少し多めに飲みはしたが、それにしてもこれは異常だった。またしてもこらえきれないほどの尿意の波が、尿道の半ばまでせり上がっているのを感じる。

(こん、らのつ……絶対、ダメツツ……お、お尻、な……舐め、られてつつ……オシッコ、しちやうなんて、そんなつ……へ、変態さん、みたいなのつ……やだもんつ！)

それでもこらえようと括約筋を締めつければ、挿入された彼の舌をキツく締めつけることになる。その刺激はそのまま理愛の腸粘膜に跳ね返り、ゾゾツと脊髄を貫く痺れが全身を脱力させ、尿意をこらえる意欲が萎えさせられてしまう。

「んはあああつ、はふうううう……ひふううつ、ひいつ、ひああああ……」

熱い吐息が口枷の穴からこぼれ、滴り落ちた唾液があごも体操着の胸元も、ベトベトに濡らしていった。濡れた布地から伝わる冷気と不快さが、さらに尿意を煽って下半身が緩み、込み上げる排泄欲に膝下の震えが止まらない。

(んあああつ、はあつ、ああああ……んつくつ、はひやつつ……やああつ……)

こらえそこねた小水の一部が尿道を押し開き、膣壺からこぼれた愛液にまざり、ポチャ
ンツとトイレの水に波紋を広げる。ベチャベチャとお尻を舐められる音に紛れ、それは聞
こえなかったかもしれない。それでもやはり、誰かに見られながらの失禁など慣れるもの
ではない。このままではまたもらしてしまふ、授業中に二度経験した屈辱をなおも味わ
される、その恐怖に両手が自然と丸まってしまふ。

(や、だつ……もうやだつ、やめてよつ、やめてよおつ……うくつ、ううううつ！)

指先が縮こまり、口枷を噛み潰さんばかりにあごが締まる。そんな抵抗を見せても、ア
ナルを舐める舌の感覚だけが膨れ上がり、頭の中を舐め尽くされてゆくようだった。

尖った舌が菊皺を貫き、すぐさま引き抜かれると菊門は閉ざされる。だが男の舌がもう
一度押し当てられると、その感触を待ち望んだように腸口が開き、柔らかくなった舌を粘
膜に取り込んでゆく。そうなればもう、男の思いのままだった。縦横無尽に舌がぐねり、
唾液を腸液に絡ませて菊口から滴らせる。腸壁を舌腹が這って、舌先がチロチロと小刻み
に動き、蕩けた菊肉をしゃぶり溶かす。

(んにやああああ……はひやつ、ふにやああああ……あうつ、はうううう……)

意識が真っ白に染まり、誤魔化すこともできないくらいポチャポチャと音を立て、淫ら
な三つの口が淫涎を垂らし続けている。まだ本格的な決壊は訪れない、けれど筋肉は完全に抵
抗を失い、いまは人としての理性が懸命に尿道を締めつけているだけだ。小刻みに小水が
こぼれ、膣口は牝蜜を垂らし続ける。菊門も彼の舌を感じるだけで開きっぱなし、それど

ころかすつかりその粘膜塊に従属し、舐められるのを待ち侘びているように、桃色の窄まりがヒクヒクッとわなないていた。

「んりゅつつ、れろおおお……ふう、そろそろいいつかね？」

「ふほおおつ……おおつ、あおおおお……んぐつ、んああ……」

舌が抜け落ちて、緩みきったお尻の穴が開いているのを感じる。その先には男の刺すような視線があるとわかっているのに、肛門は閉じてくれない。さっきまでの感触と快感を要求するように、小さな開閉を繰り返しているのが恥ずかしくてたまらなかった。

（あふつ、ふああああ……や、やつと、終わり……我慢、できたあ……んつ）

彼が顔を上げた気配を感じ、ようやく休憩できると安堵する。すぐに再開されるのかもしれないが、それまでになんとか尿意を引つ込めなければと思ひ直し、理愛は下半身を叱咤するように、再び括約筋を引き締めた。と、そこへ――。

「それじゃあ……学園のアイドル、有栖川先輩の初アナルいただきますよ〜つと」

（えっ……な、んて、いま……ウ、ウソ、だよねっ……そんな――）

聞き間違いかと思つたその瞬間、熱く硬い塊をアナルに押しつけられ、心臓を鷲掴みにされたような衝撃が走る。けれど同時に、まるで空腹の最中に大好物を目にした唇のように、淫口から卑猥な涎が流れ落ちた。それを自覚して理愛は顔を真っ赤に染めて恥じ入り、せめてもの抵抗を示すようにしつかりと下半身に力を込める。

「くふつ、んううつ……ひうつつ、いつ……あやっ、はっ……んはああああつ！」

それでも、潤んだ牝に押しつけられる牡の感触を受けては、すべてが霧散する。

窄めた菊皺に、下級生にしては大きな亀頭を押しつけられるや、彼の唾液に塗れたアナルが咲き綻ぶ花のように花弁皺を開いてゆく。なんの抵抗もなく、むしろ喜んで受け入れるように大口を開いて、唾液代わりの腸液でたっぷり粘糸を引きながら――。

「あふつ、はつつ、ふやあああ……うんつつ！ んひいっ、ひぎつつ……」

——グパアアアア……又チュツ、クプツツ、ヌルオオオオツツ……クポオオツツ！

（こ、んな……こんな、ことつ……いひつ、ひやつつ、やつ……だ、ダメツ……）

排便するときのように肛門が開く、それを男子たちが眺めているということを意識するだけで、もう顔から火が出るどころではない。羞恥のあまり気を失いそうだった。

そんな理愛の想いとは裏腹に菊口は亀頭を飲み込もうと、皺を限界まで広げて、不潔なその部分に吸いついてゆく。ネロリ、又チュリと音を響かせて粘膜を擦りつけ、背後から男が挿入しているはずなのに、まるで肛門のほうから唾えついているようだった。

「あ、やつぱこつちもイケるんだな、理愛ちゃん」「全身性器って感じだわ、マジで」

（なんで、そんなつ……違うよつ、違うつ……の、につ……いつひいいい——つつ！）

——グチュヌウウウツツツ、ジユブブツツツ、ズブウウウツツツ！

胸中の叫びをかき消すように、熱い存在感がアヌスを貫き、ふやけきつた腸粘膜を拡張してゆく。まるでお腹に熱い杭を埋め込まれるような強烈な圧迫感、息苦しさと快感が背筋を突き抜け、呼吸が止まるほどに頭を真っ白に染め抜く。あまりの衝撃に瞳が裏返りか

け、口枷の穴からはトロトロの糖蜜が垂れるように、大量の唾液が流れる。

けれど全身の筋肉は硬直するどころか、ますます柔らかく蕩け、一瞬にして弛緩させられていた。人体の急所でもある肛門を穿られると、どんな人間であつても身体中から力が抜け、立つていられないこともあるほどだ。そこに快感を同時に注がれた理愛は、もはやこらえようもなく欲求に飲み込まれ、溜め込んだ欲望を排泄してゆく。

——チヨロロツ……ジョロロロロロロツツ、ジョボボボボツツ……

「あぐつ、あつ……うつ、うああああ……うつ、ふうううつ……」

我慢できず、またももらしてしまった。恥ずかしさも悔しさもあるのに、なぜだろう、ここまでされると仕方ない、もうどうにもならないんだと、諦めのような境地が排泄を許し、理性を緩ませる。こらえにこらえた尿意を吐きだす心地よさが尿道を駆け抜け、生理的欲求を満たす快感は肉悦にすり替わり、全身に甘く蕩ける波を広げていった。

「あおおおつ、んつ、ふあつ……はやあああつ、あぐつ、んおおおつ！」

亀頭を捻じ込んだまま男が腰を引くと、菊皺がニユプニユプと卑猥な擦過音を奏でて引き伸ばされた。肉傘に吸いついて菊粘膜が裏返り、挿入されると肉壺がキュウウツと締まってペニスを噛み締める。すでに膣肉と同じくらい蕩けていた腸粘膜は、完全に牡槍を受け入れて快感に溺れ、どこまでも柔軟に開いて、苦痛など欠片もない快感を貪る。

「はふおおおつ、おおほつ、ほおおお……んおつ、ふあああつ……」

「お、さっすが理愛ちゃん♪」「初アナルで即おもらしとか、マジでド変態～」さつき

ももらしたのにこの量とか、これからはオムツしといたほうがいいんじゃない？」

周囲からの男子の声で羞恥を煽る、けれどもオシッコは止まらず、先の二回の失禁よりもさらに量と勢いを増して、ジョボジョボとトイレの中に黄金の水流を落とした。その間にもアナルへの抽挿は徐々に激しくなり、亀頭だけではなく少しずつ肉幹が深く捻じ込まれ、それに合わせて理愛の喘ぎも艶が増し、声が大きくなつてゆく。

「あとおおおんっ、ほおっ、はううううっつ！ んはっ、ふあああんっつ!!」

亀頭の傘に拡張される腸壺、そこに野太い肉幹が突き刺さり、戻ろうとする菊肉がプチユツツと口づけ、絡みついてゆく。逞しい牡肉に擦れるだけで背筋が痺れ、さらなる挿入をねだるように尻房が揺れる。

(ふにやあああ……わ、らひっ、へ……変っ、へえんっ……おか、ひいよお……)

こんな場所を刺激されるのは初めて、ましてペニスを入れられたことなんてない。それなのにこれほどの快感を覚え、苦痛をまるで感じないことは、明らかに異常だった。けれど直腸の奥深くまで肉棒で貫かれ、ゆつくりと引きだされると、もうなにも考えられないくらい頭が桃色に塗り替えられる。排便しているような生理的快感に膝が震え、止まりかけていた小水がまた新たに、勢いよく尿道を押し開いていった。

——「ちょロツ……ジョボボボボボツツ、バシャシャシャシャツ、ジョボオオオオ……」

「はあっ、あっ、んんああっつっ！ あごっ、ほおおおっつ……」

擬似排便と失禁、さらに腸粘膜を犯される快感、すべてが頭の中で絡み合う。広がる淫



熱に肉体は炙られ、どこまでも淫らに意識が灼かれ、快楽の頂いただきに上り詰めてゆく。

(はぎつつ、あひいいいっ……んっ、こっ、こんらあ……あああつ、こんら、とこれええ……こんなこと、されてえ……んいっ、イ、クうっ……や、やらああっ！)

吸いつく菊粘膜を思い切り伸ばし、ひよつとこ口のように肛門を引っ張りだされ、そこから一気に最奥まで肉棒を押し込まれた。頭の裏側がジンと熱く疼き、背中が跳ねる、お尻がヒクつき、下半身が蕩ける。全身を満たす絶頂の波に唾液が溢れ、ギャグボールの無数の穴からダラダラと滴り落ちた。

(ああああつ、イクッ、イクイクツツ、イクううつつ!! んはっ、はあああ……)

いったい自分は、このままどうなってしまうのか――。

不安が胸を満たして苦しくなる一方で、身体を蕩かす甘い刺激に心が奪われている自分を自覚し、恐怖に膝が震える。このままではダメだと言いつ聞かず、それでも肉棒を動かされると肉体が従属し、みつともなく腰を振ってしまう。さらには、一度は途切れてもすぐに次の、そしてまた次の尿意が込み上げて、排泄を我慢することさえできない。

「あふつ、はうううつつ、うぐつ、えぐうううつつ……うあつ、あああああつ……」

すべてが気持ちいい――そう思ってしまうことが悔しく、悲しく、理愛はポロポロと大粒の涙をこぼして泣いた。背後で男が小さく呻き、腰を密着させられ、腸内の異物が大きく膨らみ、ドロドロとした濃厚な欲望を吐きだす。その感触だけでまたも絶頂に追いやられた意識を真っ白にし、激しくオシッコを撒き散らして、理愛はビクビクと痙攣する。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!

二次元
ドリームマガジン
ED DREAM MAGAZINE

今月の特集
公開調教

偶数月
17日発売

二次元 ドリームマガジン ED DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

COMIC
UNREAL
ファンタジー

06 2013
FUNE
price 680yen
祝7周年!

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

Hisasi
エロトシヨロ
ドモセシヨウサク

不思議の海へ
飛び込んで

奇数月
12日発売

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!

絶好調コミカライズ!
対魔忍アサギ3
高浜太郎 監修 Anime Earth

不良っ娘エロバトル!
ぼんかラブ!
歌麿

奇数月
下旬発売

ヒロインが
ちまくるアンソロジー!

MEGAMI
CRISIS

12

歌麿

COMIC UNREAL ファンタジー

メガミ クライシス MEGAMI CRISIS

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

※いずれも18歳未満の方は
購入できません。